

中国・東北三省歴史の旅（2/4）

地球の随所でこうした病巣があり、拡大し、数を増やしてゆくに違いない。これを開発と呼ぶとすれば、開発と正比例して大都市が次々と誕生してきたし、するのだろう。かねてから私は、地球にとって、人類がいなくなればたちまちにして地球環境は復元するだろうと思い、「都市はガン病巣であり、私たち都会人はガン細胞」との想いを抱いていた。商社時代の17年近くの間、私は常に開発という文字が伴った部門に属していた。その開発が、半面では破壊と同義語であったことに気付いた時のこと振り返った。生きとしあげるもののが乗り合わせている地球を蝕みながら、それを開発と見ていたわけだ。いずれ人類は、地下資源の枯渇や、環境破壊や汚染の弊害などにさいなまれ、地上資源と太陽の恵み（自然エネルギーなど）の範囲内で生き、繁栄しなければならなくなる。そうと私は1973年に覚悟したが、当時の想いをたぐりはじめた。なるだけ早く、人類は未来世代の同意がとれる生き方に改めるべきだ、と気づいたころの想いだ。

次いで平頂山惨案記念館に移動した。薄暗い施設に入ると、次々と「ねつ造」であってほしいと願った写真が目に飛び込んできた。さまざまな注意書きを読み、無残な躯の在りし日の姿を想像しながら歩んだが、当時のわが兵士の心境にまで踏みこんでしまった。自由を完全に剥奪され、命令には絶対服従を強いられていた兵士の心境になり、身震いした。



この惨状を生じさせたキッカケは（1932年9月15日の夜に撫順炭鉱が襲撃され、5人の日本人が殺されたという）撫順炭鉱襲撃事件である。当時、日本軍が「匪賊」と呼んでいた抗日組織（遼寧民衆自衛軍）の襲撃だった。関東軍は早速、翌16日に報復に出た。抗日組織は平頂山集落を通過した勘定だが、そうと知りながら撫順炭鉱に通報しなかったわけで、同集落の住民が「匪賊」に通じているものと見ての報復だった。この現実をこの目で確かめたくて、階段を下りた。



無抵抗の住民3000余名を虐殺し、遺体を川（？）に放り込み、ガソリンをかけて焼いてとどめを刺したのだろう、と私は見た。だが現実は、「日本軍は住民を集落の西側にある崖下に集め、機関銃で一斉射撃を行った。その後、死体にガソリンをかけて焼却し、崖を爆破し、死体を覆った。事件後長い間埋ったままの状態であったが、戦後中国政府により発掘された。現在は、遺骨を覆うように記念館が建てられ、今日に至っている。遺骨は虐殺された当時のままの状態で保存されている」

当時、日本軍はこの報復行為が「匪賊」をおとなしくさせるとか、他の集落の住民を「通報する気にさせる」とでも考えていたのだろうか。

同集落の住民の多くはきっと、撫順炭鉱に職を得て、収入を得ていたに違いない。にもかかわらず、との思いが日本軍をいきりたたせたのではないか。もし、飼い犬に噛まれたような怒りを覚え、かくなる挙動に出たとすれば、日本側の意識には「人」として重大な欠落があったことになる。

人間にとって最も大事なことは各人の自由であり、それを尊重し合うことだと思う。それが眞の活力の源泉になる国民を育まないと、眞の愛国心など育くめるはずがない。いわんや「五族協和」や「王道樂土」などと謳いあげて始まったプロジェクトではないか。過日の台湾旅行を思い出し、失望が倍化した。ここ旧満州では、他の民族は、その生命と財産さえ守れば、自由など踏みにじっても感謝されて当然、とでも思っていたのだろうか。

「待てよ」と、反省もした。これは私たち日本人の悪しき習い性ではないか。現政権は今も「国民の生命と財産を守る」と繰り返し標榜するが、「国民の自由を守る」とは言ったことがない。にもかかわらず、私たちは現政権を支持している。これが習い性であるとするならば、マズイ。

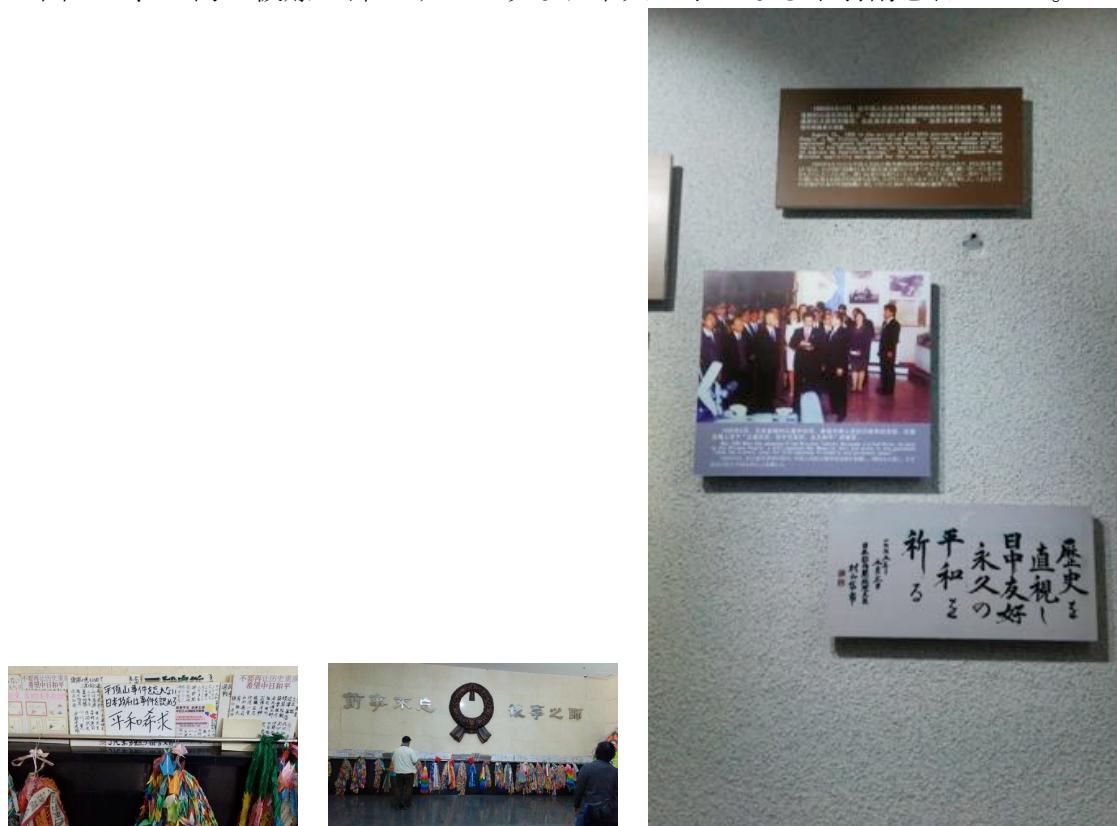
地球を壊しつつある人類は今、ズル賢い「ヒト」から真っ当な「人」に生まれ変わるために葛藤している。生まれ変わらなければいずれは断末魔が待ち受けている、と気付き始めている。この転換に、日本はまたぞろ出遅れるのではないか。

もっとも、「ヒト」の自由と「人」の自由、つまり“人類が持ち合せるあらゆる他の動物と共有する部分の自由”と“人類のみが持ち合せる部分の「自由」”を峻別する必要がある、と思う。仮に前者を“欲望の解放”とすれば、後者は“人間の解放”ということになる。この後者の自由の尊重が望まれている。「五族協和」を計り「王道楽土」を築こうと謳いながら、2つの自由をゴッチャにして、“人間の解放”である自由まで踏みにじり、弾圧したのではないか。

本来なら、リーダーは、そうした行動は押しとどめなくてはいけない。「それは匪賊をかえっていきりたたせ、他の村落の住民まで余計に匪賊と組みしたくならせかねない」と諭さなければならない。そうはせずに報復命令を下したら、兵士の心まで毒してしまい、暴発させかねない。つまり、命令に忠実に従ったという意識での蛮行ではなく、自己の暴発になり、やがて呵責の念を抱かせかねず、自己責任であったかのごとくに悶々と自閉させてしまうのではないか。

もし「10数年早く生まれていたら」と、いつしかわが身に置き換えて考え始め、陰鬱になった。だが幸い、出口にさしかかり、吾に返り、柱の陰に隠れて合掌できた。そこから、鈴木さちよさんの合掌姿が望まれた。

出口で、広島の被爆の碑でみたような日本人の手による千羽鶴を目にした。



帰途に着いた。皆さんにはしばし寡黙。最初に声を発したのは宮崎陽平さんだった。「日本人は悪いことをしてたんですね」だった。おそらく、ドイツのように、

戦争の実態を学校で教えられておらず、戸惑いもあったのではないか。

なぜか私は「違う。その考え方オカシイ」とさえ切った。散々苦悶していた最中だったので、このような言葉を発してしまったのだろう。だから、「人間は悪いことをするんだ」との言葉を加えた。そこで吾に返り、「戦争が悪いことをさせるんだ」とつけ加えた。さらに、冷静さを取り戻し、「だから私たちは憲法9条を持つようになり、堅持しているのではないか」とつないだ。

帰途、再び、入場する前に見たモニュメントの3000という文字を横目で見た。そして、この訪問の意義を噛みしめ直した。私も最初に見た時は、「白髪三千丈の類では…」と見ていたくらいがあった。先の主施設館内で犠牲者名簿に触れて来たばかりなので、率直に反省した。



大げさとか、捏造とか言って済む話ではない。広島や長崎の犠牲者名簿と同様に、1人1人確かめて特定した名簿に違いない。DNAなどを調べれば、さらに生々しい事実も読み解けそうだ。

帰国後、撮影した写真の犠牲者名簿を丁寧に眺め直したが、さらに意識を改め

るところとなった。犠牲者の兄弟姉妹の中には未だ生存者もいることだろう。その姻戚関係者にいたっては大勢いるに違いない。にもかかわらず、なぜこうした悲惨な姿を人目に晒したままにしているのか。晒さなければならないのか、との苦悶だ。私の感覚では、これでは犠牲者の魂は成仏できないはずだ。また、命令で手を下した日本兵も、心安らかに生をまとうできないのではないか。

ふと私は、専用バス内での高安先生の発言を思い出した。宮崎さんとの会話だった。医師として臨終に立ち合ったおりの体験談で、戦時中に犯した残虐行為が胸につかえており、このままでは成仏できないとの元兵士の懺悔の吐露だった。



この話を後部座席で耳に挟んだが、日本が犯した幾重もの失策を悔やんだ。絞首刑に値するA級戦犯として国際的に受け入れた7人を、国内的には「公務死」としたこと。元外相の重光葵は、被告席で生々しい証言を聞き「醜態耳を覆わしむ。日本魂腐れるか」と日記に残したが、そうした行為を公務にしただけでなく、その靈を靖国神社に移した。これは、命令を下した人と下された人を同列にしたことになり、国際的な平和を願う国としても、マズイ。戦争を否定する親族にはいたたまれないことだろう。その靖国神社を参拝する政治家がいる。

さらに、なぜ日本は、こうした戦争がなせる負の実態を、世界は広く認識し得るにもかかわらず、国民を不可知の立場に置くのか、と不安に思った。しかも、ことを正確に認識し、日本の真の安寧を願う人を異端視するような風潮を漂わせている。こうした事態や風潮などが日本で頭をもたげるたびに、平頂山惨案記念館などの施設の充実を図らせてきたのではないか。それが仮想敵国を作る上で好都合と考え、求心力向上のテコに活かし得る、と見るムキがあるとすれば、それは「人」の一面を逆なでしてヒトにする陰湿の極みではないか。

本来は、国際的に過去の戦争をキチンと清算し合い、手を携えてこうした遺骨を丁重に埋葬すべきだ。それが殺人剣を活人剣にしたサムライニッポンの名声にふさわしい。それを責務にすれば、日本にとって真の安全保障になるはずだ。

専用バスの人となって、午後の見学先に向かい始めた。車窓から市民が日常生活をのどかに繰り広げる情景を眺めながら、想うところ思うように語れない自分をもどかしく思った。訪ねる先は「撫順戦犯管理所」である。元は日本軍が1936年に、中国抗日人員を収監するために建てた施設で「撫順監獄」と呼ばれていた。



その施設が、中華人民共和国が成立した後で修繕され、今の名に改名された。そして日本人戦犯や、清朝のラストエンペラーであった溥儀を含む旧満州国の戦犯を収容し、一般人に改造するための施設として活かされた。



その娯楽施設や農業用温室などを増設した改装の在り方と、施設の生かし方が世界的に注目されている。もちろん私は、坂東捕虜収容所を思い出した。条件は多々異なるが、捕虜を人道的に扱う点では似ており、日本も第一次世界大戦時に誇れる事例を有している

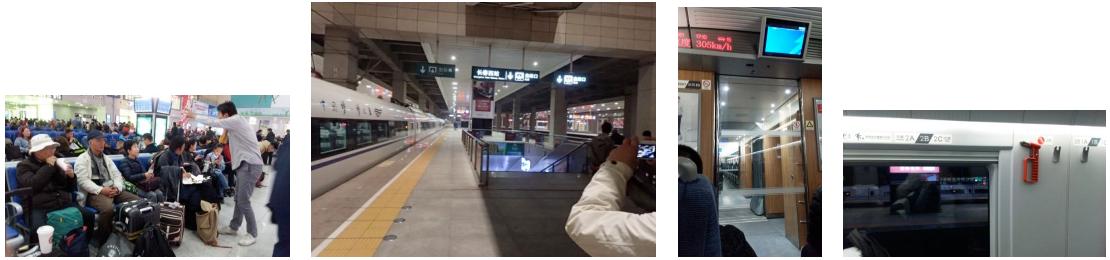


撫順戦犯管理所では、旧戦犯に対する処遇方針は「罪を憎んで人を憎まず」であり、収容されたものの中から一人も処刑者を出なかった。こうした方針は、「正しい思想を正しい方法で教育すれば人間は変わる」という毛沢東の「改造」政策に基づいており、手厚い待遇を旨とし、十分な食事が与えられ、強制労働もなかった。溥儀も、実弟と共に収監されており、模範囚として過ごし、温室で穏やかに野菜作りなどに勤しんだという。



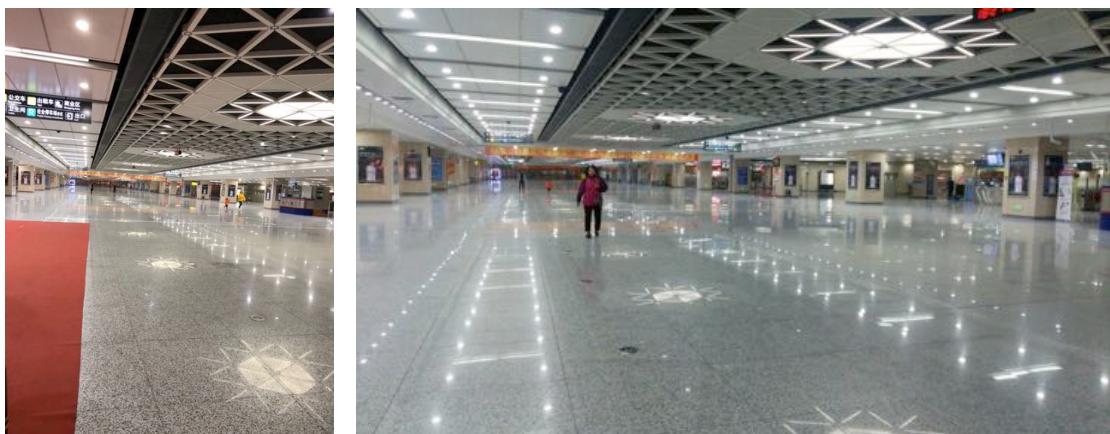
やがて日本人捕虜らは帰国を許されるが、帰国し、戦争に反省を表明すると批判を浴び、公安警察に「中国共产党帰り」として調査対象にされ、就職も難しかった、という。もちろん冷戦時代は、好戦的になり、油断ならない気分に駆られ、率直にはなれないこともあつただろう。とはいって、周首相は人間を変えない限り、戦争を防止できないという考えがあったといわれる。だから、中国は、日中戦争による被害に対し、国家賠償請求権を放棄したという事実がある。それは、日本国民を徴税によってさらなる窮地に陥ることになる、との配慮であったと聞く。ともかく、いざれにせよ偏りはいけない。

こうした想いをわが身に言い聞かせ、行きつ戻りつしながら瀋陽に到着し、旧大和ホテルに到着してから24時間過ごした。とても重苦しくて長い1日であった。だが、心はとてもスッキリしていた。今後、1つ1つ事実を自分の目で確かめることが大切だと肝に銘じた。心を新たにして瀋陽駅に向かうことになった。



16:27 発新幹線で長春に移動したが、中国の新幹線は初経験だけにキヨロキヨロと楽しんだし、快適だった。とりわけ、眼に付き良い位置に、乗客の自己責任と腕力で何時でも列車から脱出できるようにする装置があり、感心した。

長春では、瀋陽よりさらに広大な駅舎に驚かされた。中国は早晚、つまりこの駅舎の耐用年数内に、今の日本をはるかに超える高齢者比率の国になる。



その時は「構内に、路面電車が必要になるだろうな」と余計な心配をしながら、路面電車やバスなら1駅分はゆうにありそうな構内を歩き、折れた先がまた広大だった。



2台のタクシーに分乗し、宿泊先の春誼賓館（旧大和旅館）を目指した。この移動では

先行車が春誼賓館の新館側（宴会場？）玄関に到着していたことを知らず、後発車は旧館・宿泊棟玄関に着くという問題が生じた。だが、私は少しも慌てていない。ホテルのスタッフは親切で、日常会話翻訳機を持ち出し、日中会話にセットした。

この機械を活かして意思疎通を図りながら、日本は「世界におけるこの機械」のような地位を目指してはどうか、とふと思った。サムライニッポンの心、つまり勝ち負けなどの結果ではなく、プロセスを大事にする心が、まだたくさんの人の間で残っている。それが証拠に、外国人観光客の多くが、市井の日本人の親切をとても高く評価する。この「人」としての心を、国の安全保障の「要」にすれば、と考えたわけだ。逆に、再び「ヒト」の方をあぶり出し、煽るようなことがないように、と切に願った。

長春では、長映旧址博物館の見学と偽満皇宫博物館を訪れるのが主たる日程であった。その前に旧満州時代の建築遺跡群を眺めて歩き、合間に東方餃子王での昼食を、さらに午後には伝統の喫茶の予定が組まれていた。旧満映の歴史を偲ぶ長映旧址博物館や旧満皇宫博物館の見学は、いわば観光のごとき一面を持っている。翌3日目には731部隊という非人道的で言語に絶する重苦しい遺跡見学が控えていたが故に、まるでインターバルの1日のごとくに期待し、劉穎さんの配慮をありがたく感じた。



現実に、訪れて分かったことだが、子ども連れの家族が大勢訪れていた。満映とは、旧満鉄が作った映画製作会社（満州映画協会）の略称であり、長影撮影所を経て2011年から長影旧址博物館になっている。満州を1945年10月1日に解放した中国共産党は満映を直ちに接收し、紆余曲折の後、長影撮影所としており、中国共産党のプロパガンダ映画の製作に当たらせている。満映の日本人技術社員がけっこう残留し、活躍した。

帰国後のことだが、満映についてちょっと調べた。旧満映は、日本が旧満州建国の理想として掲げた「日満親善」を始め「五族共和」や「王道樂土」を目指していることを満州人に教育するのが主目的で作られた国策会社だった。つまり、「満州建国精神の普及徹底」を目的として謳い上げた。初代理事長には清朝の皇族を選らんだが、2代目の甘粕正彦から活動は本格化している。

甘粕は、関東大震災のドサクサまぎれに大杉栄を殺害した憲兵大尉だが、刑期を終え、フランスを経て満州にわたり、謀略機関の親玉として悪名を響かせた。そこを（**満州国**
法体系を作った要人）岸信介らに拾われ、満映で君臨する。大杉栄は、時の国家や権威を望ましくない存在・必要でない・有害であると考え、財閥と軍の結託や、貴族と平民の格差、あるいは好戦的思想などを攻撃し、調和的な社会に変換することを夢見た。だが、その標榜のありように違和感を覚えるような社会風潮がただよっており、アナキズム（無政府主義者）として片づけられた。

旧満映は、満州での映画作成が目的であったために、俳優だけでなく中国人監督や脚本家も採用した。甘粕も、信賞必罰の人事、スタジオの整備、ドイツから高額の機械購入などの改革に努め、現地スタッフにも慕われた。また、有能と見た大塚有章（日本共産党が資金調達のため銀行を襲わせたギャングの首謀者）や山口淑子を中国人李香蘭として取り立て、無味乾燥な国策映画から民衆が楽しめる劇映画に主力を移している。

だが、待遇面では日本人と満人の間には格段の差があり、甘粕は最後までこうした溝を埋めていない。また、就任挨拶時に、甘粕の紹介に立った日本人スタッフが「…粉骨碎身、社業の発展に努力し、満州の地に骨を埋める覚悟をもって…」と言ったところで止めさせ、世辞を非難し「死んだら骨は日本に埋めるのです」と述べている

甘粕は敗戦を知り、満映関係者の主だった日本人の帰国手配などを終えた後、20日早朝に青酸カリで服毒自殺。帰国した者は後に日本で東映を作っており、わが国の映画産業の礎になっている。だが、その後、日本政府は日本人移民に満州に居残り、土着化する命令を発したし、関東軍はソ連軍がなだれ込む前に、移民には知られぬように撤収していたこともあるって、多くの満映社員と家族らは取り残され、辛酸をなめ、日本に引き揚げるまでに10年近くを要した者がいる。